

座談会 ー変わる子どもと変わる教師ー

教師の気づき＝子どもたちの潜在能力を引き出せていなかったのではないかと？

いまの教育を考える なぜ先生たちは意味の無い使い方をしたのか？

これまでの ICT 教育では、子どもに効果的に学習させることに主眼をおいてきました。一方、魔法のプロジェクトはタブレットの機動性を活かし、子どもが常時携帯し、自分の学習上の苦手を補うツールとしてそれを活用するプロジェクトとしてスタートしました。しかし、先生たちは常に子どもたちを上手くコントロールし、何か課題としてやらせる教育から離れられないのかと思うような実践が数多く報告されました。

なぜそういった方向にタブレット利用が進んでしまうのか、タブレットを子どもの能力の一部と捉えた事で先生たちの教育や意識がどう変わったのかをプロジェクトに参加した先生たちと話し合ってみました。

中邑：IT 機器を使っていわゆる教育をしていこう、タブレットを普通教室に導入しようというのは「子どもを変えよう。子どもの学力を伸ばそう。共同学習を実施しよう」ということが中心です。しかし、単なるドリルのしくみとして使っているという現状があります。

これは私たちが考えていることとは全く違います。

私たちはタブレットを導入し、未来の時代に向かって、能力は何かということ問い直したいと思います。魔法のプロジェクトは民間のプロジェクトなので公的な事業と違い、自由なことができます。これまでタブレットを有効に使ってきたとは言えません。子どもたちの潜在能力を引き出せていなかったのではないかと、先生たちの反応で思いました。タブレットによって、できなかった子どもができるようになる。タブレットは気づきを与えてくれる役割をしてくれます。

なぜ先生は意味のない使い方をしたのか。これは今の学校の仕組みが原因ではないかなと。その問題点も議論で明らかにできればいいと思っております。

佐藤：魔法のプロジェクトの事務局から貸し出しているのは、タブレットの Wi-Fi+セルラーモデルです。子どもたちがいつでもどこでも使えるものを選びました。

はじめの頃は Wi-Fi+セルラーモデルといっても何のことかわからず、とりあえず応募してみようという学校がほとんどでした。

絶対に壊してはならないと金庫に納められたり、学校に Wi-Fi を設置させるのにも苦労したりするなどいろんなことがありました。

タブレットに対する考えも時代とともに変化してきた
その中でプロジェクトへの応募は、機械に強い先生以外にも、
機械にあまり興味がない先生からもあった
魔法のプロジェクトへの応募のきっかけや活動して気づいた
ことは様々だ



井上：私は DS のタッチ画面に可能性を感じ、タブレットの導入にも応募しました。機械音痴だから不安でしたが、なんとか採用していただきました。先生たちはわからないことを丁寧に教えてくださり、とても助かりました。

青木：私は障がいのある子どものコミュニケーションを勉強していました。魔法のプロジェクトに参加するときには、すでに自分が作ったアプリも使っていました。学校が授業でパソコン

を使うことを許可してくれたことも幸いでした。

福井：私は子どもにとって良いものはないかといつも考えていました。このプロジェクトはみなさんがフラットに情報交換でき、本当にありがたいと感じています。教師の工夫や考える力をより引き出し、情報交換することにより、負担が軽くなる。自己満足に気づかなかったことをより意味のあるものに変えていける場所だと思います。

岡本：私は「魔法のプロジェクト」というのは選び抜かれた優秀な先生たちを囲い込む集団だと思っていました。ずるいなあと。しかし、私も仲間に入れていただき、いろんな考えをお持ちの先生たちが、多方面の角度から意見を出し合って皆で考える場所なのだと気づきました。

武内：私は今まで ICT で教材を作ったり、修学旅行のしおりに作ったり、事務的作業の道具として使っていました。ところが、このプロジェクトに参加して、コミュニケーションツールとして使える、楽しみや苦しみを表現するための道具である事を知り、これは使えるかもしれないと思いました。

**タブレットをどのように使えばよいのか試行錯誤しながら取り組んでいくうちに
タブレットは社会に繋がる道具になるという発見があった
子どもたちの未来へどのように活かせるのだろうか**

井上：魔法のプロジェクトには、障がい者のいろんな事例があったのがよかったと思います。ひとりひとり違う学び方を知ることができました。勉強することは、その子の人生に繋がると考えさせられました。

青木：私はシンボルを開発してきたのですが、タブレットが広まっていき、障がいのある人もそうでない人も一緒に使えることがわかりました。使える子どもにはその技術を自分のものにして卒業してほしいなと思います。

佐藤：高校生になると就学助成金が出て、タブレットを購入することができ、社会にでてもそれを持っていかせるというようになりましたね。

福井：私はアナログの人間でしたが、障がいを持った子どもたちが学校を卒業した後も、コミュニケーションがとれればいいなあと考えていました。そこで、ブログや SNS を自分で試していました。これは使えると考え、特別支援学校に一台置くべきだと思っていたのです。学校を離れてもつながれる道具として使えるといいですね。

岡本：そうですね。学校の中でできることには限界があります。何のために学ぶのかというと社会と繋がるため、社会でも困らないようにするためだと考えました。圧倒的に社会との接触の少ない子どもにリアルな体験をさせて、社会に出られるようにする。また、学校を卒業してからも学校でやったことが活かせるようにするというで私は映像を作って活動の場を広げました。

**タブレットは何のために必要なのか
誰のために使うのだろう**

「使わなければならない」という誤った認識を捨て、本当の目的を見つめ直す必要がある

中邑：年輩の方は新しい道具に抵抗があるのですが、なぜ福井先生は使おうと思ったのですか？

福井：子どもたちのことをもっとわかりたい、なんとかしたいと思ったのです。SNS が広がってきて、子どもたちに有効になってきた頃に、そろそろ子どもが悪さをするだろ

うということで自治体に禁止されました。ですから、中邑先生の講義を聞いたときは、自分のやってきたことが肯定されたように嬉しく思いました。

一つ一つ私がやってきたことを魔法のプロジェクトで再確認できたのです。子どもはタブレットに対して直感的に触って理解します。ようやく学校が昨年を導入してくれました。これでコミュニケーションが続けられると思いました。



中邑：子どもとのコミュニケーションが大事だと思っていたからこそ、福井先生はタブレットの重要性を感じたのですね。

井上：情報系の詳しいベテランの先生はどちらかというより難しく説明される方が多いのですが、福井先生は「なんでもやってみよう！それおもしろい！」と、子どもに使えるのではという視点がわかりやすいのです。

その積極的な取り組みにとっても共感させていただきました。私と福井先生は世代がちがっても子どもたちの可能性は何かを探そうとする同志なんだと感じ、一緒に活動をさせていただきました。

中邑：子どもたちに使えるということが大切ですね。主語が常に子どもだということに気づいているかどうか。
逆に何のための道具かわからず、これで勉強させようとしている先生たちも多いですね。

井上：先生たちと話していて、なんでもかんでもタブレットを使えばいいということではなくて、その子どもの必要に応じて使うということがなかなか伝わらないこともあります。その子どもにとって必要かどうかということにどうして焦点が当てられないのかと。

岡本：たしかに、タブレットがあるのにちょっとしか使わないのかと驚かれる方もいらっしゃいます。タブレットを使うための授業ではなく、その子どもにとって、授業の中でタブレットが必要かどうかということになかなか気づけない。

中邑：それは先生が楽だから使いたい、先生が試してみたいなど、子どもが主語ではなく、先生が主語になっているのではないですか？
タブレットを与えていけば、子どもがおとなしくなる、手がかからないという子守り的な発想で使っても、子どもには意味がありません。また、せっかくタブレットがあるのだから使わないういけないという発想も子どもから離れてしまいます。子どもの可能性を伸ばす事にはなりませんね。

青木：タブレットを与えておけばおとなしい、じっとしているといった子守りの役割に使ったり、これをやり終えたらタブレットが使えるなどご褒美としての価値をもたせたり、私もかつてはそうのように使っていた時期もありました。

岡本：学校の年功序列の態勢もあり、今まで先輩方がやってきた通りにやらなければならない場合も多かったです。新しい事に取り組むには勇気が必要だったかもしれません。

武内：重度の障がいの子どもの場合、子どもにとって、これが本当によいのかどうか、見極める事が難しいです。これはタブレットに限らず、何に対してもそうなのですが。タブレットを使い始めてずっと寝たきりの子どもが、起きている時間が長くなったというのは、何か変化が起きていると感じています。

中邑：子どもたちをしっかりとみるということは重要です。タブレットを使うと喜んでいて思い込んではいけません。タブレットを使っている子どもをみて、先生がうれしそうにするからという理由で子どもがタブレットに触れていることだってあるのです。

井上：子どもたちはひとりひとり違う。だから事例をいくら聞いても、その子どもに合うものが見つからない場合もあります。いろいろ試してみて、どの方法がよいかしっかりと見極めることが大切だと思います。タブレットを使わない方がよい場合だってあります。

突き抜けた事例とそうでない事例

魔法のプロジェクトにはどちらの事例も大切で、その事例から活動を考える

岡本：私は情報系のソフトはつまらないと思っていたのですが、お金を使う勉強のためにスーパーの写真撮ってそれを見せた授業に子どもたちは大きな興味を示しました。これは何か使えるかもしれないと思い、平成 18 年に研究会で中邑先生の話をお聞きして、世界が広がるのを感じました。

また、突き抜けた事例とそうでない事例の差に驚きました。この両方を聞いた事はとてもよかったです。

現場で使い始めると、障がいのある子どもがリマインドを使いこなして自分の写真を撮っていたことは衝撃的でした。

担当する子どもが中学校の地域交流で、通常学級に参加し、初めて英語の授業を受けたとき、タブレットを使うのが誰よりもうまかったということもありました。単語の意味をサファリで調べ、手をあげて答えたときは教室がどよめきましたね。

校外学習でうどん屋に行くときは、アレルギーのある子どもがうどん屋にタブレットで電話をしてアレルギーについて聞き出すなど、タブレットを使いこなしていました。

僕自身も人見知りだったのですが、Facebook もちゃんと参加して、今もみなさんと話せるようになりました（笑）。

人見知りのころは、情報は知らせずに溜め込むタイプだったのですが、いまではパソコンのおかげで発信するようになりました。

中邑：今ではいろいろな先生たちが突き抜けやすくなったのではないかと思います。一人だと難しいですが、みんながいれば変わるのではないのでしょうか。

井上：岡本先生はやる事が半端なくて、子どもにジェットコースターを体験させるために、模擬遊具を作った話は本当に衝撃でした。スケールが大きいですね。

岡本：映像を見せるだけではなくて、体感する事が大事だとあれこれやっていたらそうなってしまったのです。模擬体験が自信となって本当の体験をしてみたいと思えるのだとわかったのです。

武内：私はなんでタブレットなのかと中邑先生に聞かれたとき、どうしてなのかを深く考えていなかったことを反省させられました。

タブレットはすぐに反応が返ってくるから、子どもたちと相性がいいのだなと思いました。パソコンなどの情報機器をいじるのは大好きなのですが、全て独学でした。動画もつくりたいと思っていたときに、動画クラブに参加させていただいて世界が広がりました。

タブレットを使う意味を考える

子どもにとって何が必要で、何に困っているかをよく知らない

タブレットを使わなければ意味がない

意味のない使い方をしていないだろうか

青木：私はタブレットで行う意味を問い続けなければならないと思っています。

もしかしたら、子どもたちにただ新しい刺激を与えるだけになっていたかもしれない。刺激以外のものは何かあるのか。取り組んで行くうちにその検証が足りなくなってしまう。だからタブレットをきっかけにして、子どもたちの反応を詳しく調べなければいけないと思っています。子どもたちはタブレットを使うことによって、盛り上がった先生をみて反応しているのではないかとも感じています。

中邑：そうですね。タブレットが先生の活動のためにあるようにも思えます。空いた時間を埋めるのにこれがあれば便利だと考えている先生もいます。

子どものために使っているのではなく、先生のために使われているのです。私は重度の障がいのある子は、体力に合わせて早く家に帰ってもいいと思っています。ずっといなきゃいけないから、先生が無理矢理タブレットで授業を作っている。長い時間に耐えられない子どもいるのにその状況を考えずに決められた時間をこなそうとしているのはおかしいと思いませんか。

武内：私も重度の障がいのある子どもにかかわっているのですが、タブレットのおかげでうまくいったのかどうかかわからないという同じ悩みを抱えています。

先生たちとお話していると、一番多い質問が一時間のうちにタブレットを何分使っているかということです。

それは授業によって異なりますし、必要な時に使うだけなので、一時間に何分使うかという時間が大切なわけではありません。

こういう質問がでる理由は、タブレットを状況を考えずにただ使えばいいと思っている方が多いということです。一番大事なことは、タブレットを使うことではなく、ひとりひとりの子どもに何が必要で、何に困っているかということです。それを知らずしてタブレットを使っても何の意味もないのです。



中邑：何が必要で、何に困っているかを知らずにこのまま使っていると、タブレットを使っても何にも変わらない。まだまだタブレットの必要性が伝わっていないし、正しくない気がします。タブレットに子守りをゆだねているようなことになってしまいます。

ただタブレットを子どもに与えればよいわけではない 意味のある使い方をするにはその環境に配慮する必要がある

青木：タブレットを買ってもらった子どもが、動画みている時間が長いと心配されていました。子どもは動画をおもしろいと感じて見ているかという、実はそうではないのです。ですから、そのタブレットを学習のツールに戻すことはちゃんとできます。どうして動画を見ている時間が長かったかという、タブレットを子どもに与えた環境に問題があったのです。動画をみせておけばおとなしいからと考えて与えた結果、動画を見る時間が長くなったという背景がありました。使い方には十分に気をつけなければならないと思います。

岡本：何のためにタブレットを使うのかということをやっと考えるチャンスを与えてもらえるのが魔法のプロジェクトだと思います。新しい事をするのは勇気が入りますが、ここでは上下の立場など関係なくフラットに発表し、意見の交換ができるのですから。

井上：タブレットで勝手にゲームをしないかともよく質問されますが、勉強中にゲームはしませんよね。タブレットをどのように使うのかちゃんとその意味を伝えて与える。遊具ではなく、自分の能力を活かすための道具として使うということを与えるときにきちんと理解させることが大切なのではないでしょうか。

子どもを主語にした使い方が本当にできているのだろうか 教師はその子どもにとって何が重要かという事を学ばなければならない

福井：私は子どもにタブレットで本をめくるという体験を与えました。そうしたら、今まで興味がなかった絵本に興味を持ち始めたのです。タブレットは何かを始めるためのスイッチ。どんなスイッチになるのかはそれぞれの子どもによって変わってきます。それを見逃す事なく、個別に対応できるかどうか。それが子どもを主語にした使い方だと思うのです。

中邑：そのとおりですね。子どもを主語にした使い方をしたいのです。タブレットは重度重複障がいの子もたちが使いこなすのは難しいかもしれません。子どもにとってではなく、先生にとって便利なツールになります。タブレットは単に遊ばせるためのツールはなく、子どもの能力と先生の教育実践を評価するツールだと思います。そういうツールを観察する道具としてみていくと、子どもの表出が見えてきます。タブレットは子どもの認知レベルが随分違うにもかかわらず、誰もが同じように使える道具だと錯覚されてしまうことが多いですが、タブレットが問題でなく、子どもたちに何が必要か考えていないのがよくないと思いました。それを考える力を先生がつけてから使うべきなのではないでしょうか。

佐藤：この中で武内先生が一番動きが出にくい生徒とかかわっていらっしゃいますね。武内先生はタブレットを使うことによって重度重複障がいの子もたちとのかかわり方は変わりましたか？

武内：変わっていません。しかし、タブレットがいらぬかと言われたら、欲しいと思うのが現状です。なぜかという、今まで、短時間しか起き上がらなかったこどもが、車椅子に座り、何かを探している様子が見受けられ、タブレットが使いたいという意思表示を感じます。そん

なときは本人が楽しいと思える活動ができるときだという気がしています。

中邑：それはタブレットがなくてもできる。けれど、タブレットがあれば、教育を見直すことができるのですね。

井上：私はアナログの教材を一人ひとりの子どもに合わせて作っています。その教材を使った先生からよくいわれるのが、「これを使ってみましたがうまくいきませんでした」という感想です。なぜうまくいかないかという、それは私の目の前のひとりの子どものために作ったものですから、他の子どもに合わなくて当然なのです。その子どもにとって何が必要なのかを考えた末、ひとりの子どものために手作りの教材を作ったのです。大切なことはどんな教材を使ったらうまくいったかということではなく、その子どもにとって何が必要かということを見つけることです。教材を使って効果がなかったからおしまいではなく、使って効果が出なかった要因をしっかりと拾って、その子どものことを学ぶということが大事なのですよね。

**タブレットは一瞬で、できない事ができるようになる便利な道具ではない
魔法とは一瞬で夢が叶うマジックではない
失敗の事例からどのように使えばよいかを認識する**

中邑：魔法のプロジェクトの「魔法」という言葉に引きずられてしまって、タブレットがあれば何でもできると錯覚してしまっていることもあるのかもしれない。

佐藤：失敗の事例もたくさんありますね。

青木：私はアプリの開発もしていますが、コミュニケーションのアプリなどを提供してもうまく使えずに戻ってくる場合が多い。そのアプリを使える環境づくりが行なわれていないということが問題です。ツールはあればよいというものではなく、どのように使えばよいかを考えなければなりません。失敗の事例から、どのように使えばよいかを認識されるといいですね。

佐藤：魔法のプロジェクトの中で3つのグループがあり、お互いに意見を言い合って、精査する機会があります。先生たちはだめと言われる習慣がないにもかかわらず、その会ではダメだしをされます。それが憂鬱になっている方も多いうように見受けられますがいかがでしょうか。

岡本：よいところだけではなく、ダメなところは絶対に言うべきだと思います。私がタブレットをほとんど使わずに授業をしていると「どうしてタブレットを使わないのですか」と聞かれました。「その授業では使う必要がないからです」と答えたら、すぐに理解していただきました。逆に、どうして使っていないことを不思議に思われたのか尋ねると、以前、魔法のプロジェクトをやっていた先生がタブレットの便利さ、素晴らしさを熱心に説いてどの場面でも使っていたので、ずっと使うものなのだと思っていらしたようです。タブレットを常に使っているという間違っただけの情報を信じて、広まっていく傾向は確かによくありますね。

井上：よくない事例に対して意見をいうことはとても気をつかいます。年輩の先生やITになじみのない先生に、この話は伝わらないだろうなと思いつつお話ししていても、先生たちが変わっていくケースもありました。人から意見をしてもらうことが少ない分、自分で修正するチャンスが減っていたのではないかと気づき、意見交換の機会をたくさん持つことが大事に感じました。

青木：意見を言うと、それに対してまた意見が跳ね返ってくるので、大変ではあります。若い先生の中にはなるほどどうなずいてくれる方もいます。そういう先生はうまくいくケースが多いですね。

福井：情報交換はほんとうに大事で、一人で抱え込んでいた荷物が少なくなると感じています。教師には資質と工夫と考える力が必要だと思います。それを高めるためには最適な場所だと思います。

武内：地域によっては情報交換したくてもどうやってすればいいかわからないこともあります。似たような情報を持って集まってもあまり役に立ちません。全国のさまざまな情報が交換できるというのはありがたいです。

井上：私は興味のない事例は飛ばして読んでいたけれど、よくない事例から学んでいかないといけないと感じました。人の事例を読むこと、意見を持つこと、それを伝えることが重要だと思ったのです。興味なかった事例もよく読んでみると問題点がみつきり、それをどのように解決すればよいかを考えることができます。どの先生も真摯に子どもと向き合っているから、そこからヒントをみつけることもできると思いました。

意見を出し合って考える

活発な議論があるからこそ新しい視点が生まれる

フラットな立場で本音で語り合える仲間がいるから発展する

佐藤：気になる視点はグループでなるべく意見を出し合って、考えるということをしてほしいと思っています。

井上：今年はスタートの研究計画から議論していたので、中間報告でお互いの事例から学べるが多かったですね。意見を書くのはプレッシャーですが、感想でも書くべきだと提案したら、どんどん書く人が増えて来たように思います。

中邑：批判されても、「私はこういうポリシーでやったんだ」と批判をくつがえせる人が増えてほしいと思っています。極端な意見があってもよいのです。周りがなんと言おうと信念をもって取り組み、それに対していろんな意見がでる。そういうぶつかり合いがないことに、物足りなさを感じます。

井上：いえ、けっこうぶつかっていますよ。研究計画に書いてある流れに違和感があって質問すると、新しい事実がでてくることがあります。実はこういうふうに行っていますと内容が変わっていることがあります。教師の特徴としては自分のやっていることを肯定するところがあって、よい事実から表に出すように思えます。子どもにとってどうなのかということが後回しになっていることもあります。けれども、話し合いを重ねているうちに、これはすごくその子に合っていると思う瞬間があるのですよ。「ここすごく面白いと思います」と肯定的な部分を見つけて意見を言うと、先生も喜ばれ、全体を見直すことでよい方向に向かうこともあります。

中邑：タブレットを使うことによってゴールを設定しやすくなったと思います。ここまでできるのだったら、この子は将来こうなるだろうと目的地のラインをひけるようになりました。それはとてもよいことだと思います。

訓練しながら、ただ同じことを繰り返すだけだと目的地は見えなかったけれど、タブレットを使えば将来につながる目的が見えるということがわかりました。

その先のここまでやれるのは、こういう人が出てくれば、いい議論になるようになると思うけど、難しいですね。

青木：そこにいくまでに批判を受けたらやる気が失せてしまうのが現状です。

福井：それでもひとりで悶々と悩んでいるよりもいいと思います。私は常に新しい事を学んでいきたいです。定年の最後の最後まで子どもに負けないように成長を続けたいと思っています。

魔法のプロジェクトの役割を考える しがらみや過去の経験に縛られない新しい教育とは何か 教師のスイッチを変える

中邑：テクノロジーを使って何かができるようになるということは医療のジャンルでも取り入れられています。

例えば、目の見えない人に iPS 細胞を移植してもすぐ視力が十分に回復するわけじゃない。けれども、テクノロジーを組み合わせることで活字を読めるようになる可能性が生まれます。医者は治療の限界を明確にして、ハイブリットでやっけていこうとしています。

重度重複障がいの子どもは別にしても、軽度の障がいの子どもは医師と一緒に組んで限界領域を明確にして、ハイブリットを用い、通常学級で勉強するということが今後は考えられます。そうなると、教員は何をすればいいのでしょうか？特別支援って何なの？ということになります。

先を見通して、テクノロジーの可能性と限界を明確にしつつ、いろんなことをやっていくのが魔法のプロジェクトの役割ではないでしょうか。

井上：担当している子どもは文字を読むことが困難でしたが、6年生になってつい先日、他の先生に「不平等条約を改正した人知っている？」と聞いたそうです。

一年前の彼は学年の社会と理科の授業を受けさせてもらっていませんでした。彼に能力があることを学校が過小評価していたのですが、その能力を理解したり、証明したりするには、タブレットを使うということが相当大きな役割を果たすと思います。その子どもは、暴れる子どもでしたが、今年になって一度も暴れていないのですよ。

Do-IT スクールでも事例を発表しましたが、読み上げがあったら 100 点採れるのに読み上げがないと 0 点という事例がありました。この子どもには能力があるのに、読み上げがないと評価されないという話をすると、たいていの教師はそれに該当する子どもの顔が思い浮かびます。子どもの何をみないといけないのかということに気づいたという声を先生たちから聞いた時に、やはり発信していくことの必要性を感じました。

中邑：その場合、多くの医師は合理的です。タブレットを使って成果がでると「それいいんじゃないの」と言います。しかし、教師は自分の過去の経験やしがらみがあって抵抗してしまいます。教師の考えをスイッチしないとすごく難しい時代がきたなとも思うのです。

福井：この子どもにこんな能力があったんだと突きつけられることもあります。教師の役割はその子どもの能力を見極め、次に繋げる責任があります。先生も年代の垣根を越えて、経験者から若い人へと繋げていかなければなりません。

中邑：テクノロジーが子どもの新しい能力を示し始めてきています。その能力をどこまで広げていけるかということの評価できる先生が必要となってくるのです。

魔法のプロジェクトの役割を考える 私たちの役割は何か？ 魔法のプロジェクトの本当の意味を探る

中邑：タブレットをどのように導入するか、若い人たちは経験がないし、経験がある人は経験ゆえに難しいところがあります。

佐藤：感覚ではなく、本当にそうなのかという評価や観察をしていこうとするところは、みなさん同じ気持ちで取り組んでいっていいんじゃないでしょうか。

武内先生は最初から比べると報告書の内容が随分かわってきているのにびっくりしましたが、何かご自身での変化はありましたか？

武内：自分の中で整理することで、ようやく冷静にみられるようになりました。今までは自己満足でないつもりだったけれど、やはり自己満足だったのかなというところがありました。

青木：どんどん参加して、積極的にやっていく中で教師も必ず変われるのだと思います。

中邑：先生たちが評価の仕方を学んでいくのは重要なのですが、そこは魔法のプロジェクトの本質ではない。子どもたちがどう変わるか、いわゆるタブレットの提供の仕方のほうが大事です。

小中学校の通常学級の中で学ぶ突き抜けた才能のある子どもの中に相当数書字が苦手な子どもが存在します。そのために不登校状態になっているのが現状です。そういう子どもに先生たちがかわれば、クラスに戻せる可能性があります。しかし、現実には手が行き届かず、そういう子どもたちが不登校になったり、問題行動を起こしたりしています。

井上：子どもは学校で勉強している時間が一番長いですし、その中で自分のできることをみつけたり、理解したりしたいのです。

学力保障は最大の生徒保障だという先生がいらっしゃいましたが、確かにそう思います。

中邑：魔法のプロジェクトが特別支援のためのプロジェクトに見られることは残念です。すべての子供たちのためのプロジェクトだと思ってやっています。

いわゆる教育機器を小中学校に導入するというプロセスの中で、訓練を繰り返して得た上限とあまり変わらない。

その伸びが子どもたちの将来にどうつながるかという、それは今までの教材とあまりかわらない。けれども特別支援を必要とする子どもたちにとっては単なるドリルではなく、能力を補うという役割を持つため、別の意味がある。それに先生たちが気づかれたことがプロジェクトの大きな成果だと思います。

しかし、このことを次につなげていく、持っていくということがまだまだ難しいのだと思います。

佐藤：岡本先生の事例で、知的な遅れのない子どもに能力があっても生活体験や教育の機会がない場合、通常学級に入ることが難しいという極端な事例もあるのだと思いました。

中邑：先生たちに極端な事例を見てもらえばいいと思います。井上先生の質問で、『この子どもたちを将来、普通学級に戻すのですか』とありましたが、それが良いと私は思います。

井上：特別支援学校にいくときは極端にどん底であることが多いのに、普通学級に戻すときは平均レベルまでいかないといけない。

これはおかしいのではないかと思います。

中邑：これは制度の問題でもあります。この本はコンフリクトを扱う本だと考えています。子どもたちの未来の学びの場が見えてくる本にしたい。訓練して、訓練して、ついていけなければ特別支援学級に入れるだけではなく、能力のある子どもは通常学級に戻そうとしているというのが私たちの役割です。

井上：その通りです。私は今年、中学の通常学級に一人返しました。高校受験も見据えています。それを判断することに対してもっと柔軟にならなきゃなと思います。

中邑：タブレットをいつも使う必要はないのです。最大限に能力をかき上げしていければいいと思っています。

特別支援学校の子どもたちで、認知的に理解のない重度の子どもが使うのは無理です。その場合は先生が使うものなのです。このような切り分けをする必要がありますね。教師の気づきがとても大切です。

子どもには未知の可能性が確かにある。

しかし、その可能性を引き出すことができないのはなぜなのだろう。

それを阻んでいる正体は何かと考えた時に、この議論のなかでは何度も「子どもが主語になっているかどうか」ということに辿り着いた。

突き抜けた事例とそうでない事例の両方があるからこそ見えてくる問題点を見逃していないだろうか。

大切なことはどんな教材を使ったらうまくいったかということではなく、その子どもにとって何が必要かということを見つけることだ。

教材を使って効果がなかったからおしまいではなく、使って効果が出なかった要因をしっかりと拾って、その子どものことを学ぶというところに至って初めて変わる。

しがらみや過去の経験に縛られることなく、新しい一歩を踏み出すチャンスがここにはある。

子どもたちの未来をつくるには、新しい一歩を皆で踏み出さなければならない。

魔法のプロジェクトでは、これからも、いまの教育から未来へつなげる教育を発信し、変わる子どもと変わる教師の輪を広げていく役割を担う。

佐藤：今回は座談会という形式で活発な議論をありがとうございました。

プロジェクトでは常に主語は子どもということを心がけていただいています。その中で「遊びも学び」ということを知りました。子どもが教科学習以外でも快・不快を表し、感じ取ることも大切な成長なのだと思います。



【座談会を終えて／感想】



青木高光 タブレットの活動が増えていったおかげで、情報の共有が増えてきています。そこでたくさんの事例に触れることもできるようになってきました。普及してきて、古い機材も出回るようになってるので、もっとタブレットを気軽に使ってもいい時代になったと思います。問題を共有すればするほど深みにはまってきますが、どんどんたくさんの事例に触れてどうすればよいかを考えていきたいです。



井上賞子 タブレットを使うことによってゴールが見えやすくなったという中邑先生の言葉が印象的でした。目の前でもがいている子どもに対してどうすればよいかと考えた時にやみくもに突き進んでもダメなことを教えてもらいましたが、いま学んでいることのゴールを設定していくことは新しい気づきとなりました。



岡本崇 子どもに無限の可能性があるというのはきれいごとだったと感じました。子どもの能力の上限をきちんと見極めたり、切り分けたりすることから逃げていたように思います。テクノロジーをどこでどういう段階で使うか考えなければいけないのだと改めて思いました。



武内美佳 すばらしい先生の意見を間近で聞けたので、あらためて学ぶことができました。タブレットをこれからどう使うか、意味付けを考えていきたいです。現場では、なにが子どものためにできるのか必死で考えています。あらゆる手を使ってでも子どもとのコミュニケーションのきっかけを作りたいのです。



福井喜章 とにかくひとつずつよい経験させてもらいました。特別支援学校に若い頃からいると外部の情報があまり入ってこなかったのです。こうして情報交換できる貴重な体験を通じて、若手にもどんどん伝えたい。タブレットがなにかのきっかけのスイッチになってもいいと感じました。